

## 第二章 放つもののみ生きる

二

われわれは物質の無常を觀て物質本来なきを知り、肉体本来なきことを知り、肉体本来なきを知って「本当にあるもの」を知ることができるのである。存在が認識の中で置き換えられなければならないのである。今まで「ある」と認めたところのものを「無い」と認め、「無い」と認めたところのものを「ある」と認めなければならぬのである。肉体はない、ただそこには波の変化があるだけである。変化が肉体である。肉体とは変化の相である。間断なく変化して正体のない肉体——かかるものは常恆の我ではない。それでは「我」とは「心」であるか、心も常に変化して常恆の相は無い、心の正体も遷流である。遷流とはもとの相を瞬時も留めないことである。もとの相を瞬時も留めないということは、本来実在しないということである。

かくて「肉体本来無」と悟った時、われわれはまず第一歩の自由自在を得る。「肉体あり、物質あり」と信じている限りわれわれは自由自在に到達しえないのである。肉体は一種の空間的物質的存在であって、空間的および物質的制約を受ける。しかも肉体は私の自由なる働きに対して具體的なる障礙とさえなるのである。病気が肉体に現われれば、その肉体を

(156)

実在だと見るかぎり、その病気は具體的な確固とした固体的な存在として自分の力ではどうもできないような存在であると観ぜられる。かくのごとくして、肉体の存在を認めるかぎり、人格の自由から墜落する。かくしてわれわれは肉体を儼存すると認めるかぎり、人格の自由を放棄する。これが病気の根元である。

人格の自由をわれわれが主張するかぎりにおいて、われわれは人格の自由を妨げるがごとき物質の存在を認めてはならないのである。物質は人格から独立した存在ではなくして、人格が自由に駆使する飴細工のような変形自在の存在であり、大音楽家が自由に操る空氣の波のような操縦自在の存在だと知ったときのみ、われわれの人格の自由は確保せられるのである。

物質をわれわれの心以外の存在だと認めるとき、われらは心の自由を放棄したことになり、人格の自由を放棄したことになる。心が肉体に対する支配権を放棄したとき肉体を支配すること能わずして病気を起こすのは当然であり、病気が起これば治りにくいのは当然である。

「肉体無し」と悟ることは、人格の自由の第一であり、解脱の第一であり、解放の第一である。しかしこれだけでは完全に解脱を得たということではない。「肉体無し」とは生命の自由さを蔽っている掩蔽物を無しと知ることであるが、掩蔽物が無くなっても、「生命」そのものが眠っていてはなんにもならぬ。「生命」そのものがその本然の自由に目覚めねばならぬ。生命そのものが宇宙に充ち満ちているところの大いなる生命と一つのものであることを悟らねばならぬ。それを悟

「肉体無し」「諸行無常」と悟るのは生命の自由の準備行動である。そのみがかわかって、われらの「生命」が大生命と一つのものだとわからないのでは、この世ははかないつまらないものとなって厭世<sup>えんせい</sup>仏教、灰身滅智<sup>けしんめつち</sup>の小乗仏教に堕ちてしまふのである。われらは「物質無し」「肉体無し」「諸行無常」  
「それはただ幻術師の現わせる幻のごとし」と悟ることは厭世<sup>えんせい</sup>観<sup>かん</sup>を起すためであってはならない。われみずからがいつさいを自由に操る幻術師となって人格の自由を実践しなければならぬ。

#### 第四章 人間観の革命

「天より下りしもののみ天へ上る」

「ヨハネ伝」にはニコデモというユダヤの長老がイエスのところへやって来て、イエスと問答をしたところが書いてあります。イエスはどう言ったかというところ「お前は生まれ更<sup>か</sup>らなければ天国へ行くことはできないのだ」とこういうぐあい<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>に言っておられます。ニコデモはユダヤの長老でずいぶん年がいった老人であるのに、生まれ更らなければ天国へ行けないといったって、そんなことはできないと思ひまして、「今さら母親の胎内へもぐり込むわけにはゆかないじゃありませんか」と、こういうように言いましたら、キリストは「生まれ更るといふのはそんなことではないのだ。肉より生まるるものは肉である。何遍生まれ更っても女の子宮から生まれて出て来るようなものはやはりこれは肉であって、そんなものは本当の生まれ更りではないのだ。本当の生まれ更りという

のは何であるかという自分はこの物質的な肉体ではない、霊なる実在であるということ<sup>こと</sup>を自覚すること。これが本当の生まれ更りである。ここに風が吹いているけれども、お前にはどこから吹いてどこに行くのかわかるまい。お前には地上の風のことを言っても、どこからどこへ行くのかわからない。どうしてお前にわしの言ってる天のことがわかるものか。天より下りしもののみ天へ上るのである」とこうイエスは言っておられますが、「天より下りしもの」だけが天国すなわち神の国に入ることができのです。神より下りしもののみが神の国へ入ることができるのです。肉から生まれた者はいつまでもたつても肉である。罪あるところの肉体がいくら後悔して、今日からよき行ないに悔い改めよう、こう思ひましても決して天国へも神の国へも行くことができないのです。ではその天国といふのはどこにあるかというところ、「ここに見よ、かしこに見よといふてはないのである。汝のうちにある」とこういふようにイエスはまた別のところで言っておられます。天国はここに見よ、かしこに見よといふぐあいに物質的世界にはないのである、神の御霊<sup>みたま</sup>が自分の内に宿って来て自己の生命となつているのであるという事実<sup>じじつ</sup>に目覚めた時、そこに自己の内に新しき生命の自覚としての天国があるのです。だから、天国とはこういう形だと恰好を見せるわけにはゆかない、なんじの内にある、心の内にある、自覚のクラリと転換したところに、そこに天国があり、神の国があるのであります。

今までわれわれは人間をばあまりにも罪深きものである、因縁に縛られているものであると考えすぎて、自分自身を

自縄自縛じじょうじばくしてしまっていたのであります。その自縄自縛され

た苦しき状態から解放されること、今までこの罪深き自分であるとこう嘆いておったこの罪深きものから脱却し去って本当に天より下りしところの神の霊が自分の内に生きているのである、この肉体は人間の本物ではない、そんな不自由不完全なものが自分ではない、神のいのちがここに生きているのが本当の自分であるということの本当に自覚しました時に、われわれは初めて悔い改めたということになるのであります。その時にわれわれはパウロの言ったように「キリスト吾にありて生くるなり」という自覚を得るのであります。キリストというものは必ずしも二千年前に肉体をもって出現したところの一個の人間だけではないのであります。あれもキリストであります、キリスト自身が「吾は道なり真理なり生命なり」と言われましたように、彼は久遠の真理が、久遠の道が当時ユダヤに出現したところの一つの神聖なる表現であります。しかしそれは一つの表現であって、久遠の神性は誰の身にも宿っているものであります。イエスは、「ヨハネ伝」の中で「吾れ往きて汝らに來たるなり……今日より後汝らのちを僕と呼ばず、友と呼ばん」と言っておられます。イエスの神性は万人に宿っているから、われらはそれを悟った時、もう僕ではなく、神の子の兄弟であり、友であるのであります。

## 第五章 善と幸福との一致

### 一、善の一般的要素

善とは何ぞやということとは古来問題になっていきます。また今も人生に生きてゆく上にこれほど重大な問題はないのであります。人に嘘をつかないのが善であるとか、泥棒しないのが善であるとか、間男しないのが善であるとか、細かく分けるとたくさんあるのですが、根本を忘れると、それが善であるか善でないかがわからないことになるのであります。

一つ一つの行為の外形につき、それを善である、悪であると形によって決めることはできないのであります。われわれは「殺人」とか「偷盜ちゆうとう」とか形の上で判断するよりも善の本質に入って判断せねばならぬと思えます。唯一の善は神のみである——これが善の本質であります。善の本質は「神」なのであります。これがたいせつなことであります。

人間の生命というものは神の生命が宿っているのです。人間がここに現われ出たのは、神なる内部の生命が、ちょうど、花が内部の力の発現として咲き出でるように、見えない内部から外部へと咲き出たところの「神の生命」こそ人間の生命なのであります。

根本が定まる必要があります。人間の生命は「神の生命」が種子から伸びて花が咲くように咲き出たのだという根本がわかりますと、人間という生命は何のためにあるかという目的もおのずからわかります。それは神を実現するためにここに発現したのであります。人間の目的は神を実現するためにあるのですから、神を実現したら善です。その反対に神を隠したら悪になります。その根本原理は永劫に変わることなき

真理であります。罪というのは、神を包んで実現せしめないことであります。神の実現を包むのが罪であって、神を現わせば善なのです。善というのは、どういう形、どういう現象とかいうものではない。神が善なのです。神が善の本体なのであります。その「善」の本体であるところの「神があらわるれば乃ち善となり、義となり、慈悲となり、調和おのずから備わり」と「甘露の法雨」に書いてありますとおり「神」が善なのですから、神が顕われたら必ず善となるのです。「何が善か」の問題は「唯一の善は神のみである」という根本真理——ここから出発しなかったならば混雑してしまうのであります。

## 二、父子の因縁を結ぶこと

時々われわれの教化している生長の家の道場へ来られましたて、病気が治りたいとか、あるいはこういう御利益を受けたとか、あるいは入学試験にパスしたいとか、お金を儲けたとか、就職口がほしいとか、良い縁談がほしいとか、実生活の具体的な一つ一つの御利益を求める人があるのですけれども、そういう人々に御利益の出ることも御利益の出ないこともあります。「いくらわたしが神様を頼んでも御利益が出てこないこともあります。」「いくらわたしが神様を頼んでも御利益が出てこない、病氣治してほしいと思っても病氣が治らない、わたしは運をよくしてほしいと思ってもいっこう運もよくなかないし、良い縁談与えてくださいと希っても良い縁談に出くわさない。だから神様なんて御利益のないいっこうつまらないものだ。いっこう聴いてくださらないものだ」と、こうたまたま嘆息せられることをうけたまわることもあるの

です。ところが、そういう人は一番大切なものを忘れているのです。その人はあまりにも小さなものをほしがっておるのです。本当に小さなものを、財産であるとか、肉体の健康であるとか、地位であるとか、名誉であるとか実にとるに足らぬ小さいものを求めておられるのです。そうしてそれらの求めているものはいったいどれだけ永遠の価値があるものであるかというところ、名誉も、地位も、財産も、健康も結局は滅びてしまふべきものである。肉体がいくら健康になったとしても、何百年も続きはしない——そんな永遠価値の小さなものをほしいほしいと言って、いちばんたいせつなものを忘れておられるのであります。では一番大切なものといったらいったい何でしょうか。一番価値のあるもの、この世の中で一番値打のあるものは何だろう。こう考えてごらんになると、それは「神」であることがわかるのです。「神」のみが一番値打があり、神のみが滅びない永遠の価値なのです。

宇宙すべてのものはみな神から生まれ出たのであって、神はすべてのすべてなのであります。その一部分の現われだけを、「これをください」などと小欲なことを考えているのですから、わたしはそんな人にもあまり欲がなさすぎるといいます。もっと大きな欲を持つべきなのです。「神」をわがものとする——こういう大きな欲をもって、「神」さえぎゅっと握って離さなかったら、神はすべてのすべてですから、すべてのものはおのずから我に備わるといふことになるのです。神はすべてのすべてなのですから、すべてを把まずにおって、そうして端々を把むから逃げてしまふ。鰻でも、その尻尾や、胴のところをギュッと掴むと逃げて逃げてしまふのです。鰻

を掴むにはコツがあるのです。すべて、ものには急所がある。そこを抑えると、全体をわがものとすることができるのであります。

鰻の攫み方はわたしは知りませんが、神様の把み方なら知っています。われわれは今まで、尾や、鰭や、胴体のぬるぬるしたところを遠慮がちに把んでおったからいけなかつたのです。われわれのまず第一に把むべきものは何であるかという、神をわがものとするということであり、神をわがものとするといっても、よそにあった神を把んで来て、自分の懐中に入れるではありません。神をわがものとするには、神様に因縁をつけねばなりません。あの美しい婦人をわたしのものにしたいというのでも、それを自分のものにするためには因縁をつけねばなりません。どういう因縁をつけるかというと、夫婦関係を結び、そして、「あなたはわたしの妻ですよ」「あなたはわたしの夫ですよ」と切っても切れない因縁をつけるのです。そうすると、どんな美しい婦人でもどんな立派なますらおでも自分のものになります。

神様をわがものにするのもこれと同じです。「あなたはわたしの父ですよ。わたしはあなたの子ですよ」と因縁をつける。そうすると神と人間とは切っても切れない因縁がついて神をわがものとするのになつてしまふ。ところが本当は神の生命から生まれている自分であつても、放蕩息子のようにその父を忘れてしまつていと神をわがものとするのができない。そこでわれわれは神を思い出し、神との関係を思い出し、種から伸びて花が咲き山るように「神を花咲き出させるのがわたしだ」と知る——これが神をわがものとするということ

なのであります。そうすると、「神」という一番善いもの——「すべてのすべて」なるものと親子関係、後嗣関係を結んだことになり、われわれは億万長者の後嗣者のようになります。

『生命の賞相』を読んだら病気が治った、百事如意になつたなどと言われる人がありますが、読んだからご利益があつたのではない、読むことによつて、その人の悟りが開けて即刻その人が「神」との間に存する親子関係の因縁がついたからです。ただわたしのなしたことは、文章の力によつて、その人に悟りを開く助縁を提供したことです。そのことをイエス・キリストも言われましたのです。「まず神の国と神の国の義を求めよ、その余のものは汝に加ふるべし」これは「マタイ伝」の山上の垂訓の一節にあります。

神はすべてのすべてなのですから、そのすべてをまず把んだ人には、あらゆるものがすでに与えられているのです。ところが、すべてを把まないで、ちよつとだけ鰭を把んでみたり、しっぽを把んでみたりするものですから、どれもこれも一緒にヌラヌラ鰻のようにすべつて逃げてしまふのです。そこで、すべてを得ようと思つたら自分と神とに父と子との因縁をつけて「父よ！」と親しく呼びかける心境にならなければなりません。

##### 五、神を愛する神想観

かようにして、われわれはまず神を愛しなければならぬ。ところが神を愛するといつても、神様はどこにおるかかわからないし形に見えないのですから、それをどうして愛するかと

いう方法論になるのですが、神は目に見えないのですから、心の世界で愛することから始めねばなりません。心の世界で愛するというのはどうするのかというと、先刻申しました日本画家は父を憎んでいたが形で愛するより先に心で毎朝拝むようにした。それと同じく神を愛するのも神想観をするようによい。「実相を観ずる歌」というのが『甘露の法雨』の末尾にあります、その中に「神は愛にして吾は神の子なれば、吾はすべてを愛し、すべては吾を愛す」という言葉があります。まず平常の神想観のとおり正坐瞑目合掌して、「実相を観ずる歌」の「神は全ての渾て、神は完全生命、神は完全智慧、神は完全聖愛」と文句を、静かにゆっくり心の中で繰り返し繰り返し唱え、神の生命が神の智慧が、神の愛が自分の周囲に充ち満ちているありさまを心に描いて、まったく神の中に包まれている気持になるのです。そして「神は愛にして、吾は神の子なれば、吾はすべてを愛し、すべては吾を愛す」の句を心の中で唱え、心の底深く、神は愛である、神は完全聖愛である、その神の愛が今自分の周囲に自分の中に充ち満ちて自分を愛し生かしているのだということ深く思い出し、念じまして、「神はわたしを愛しわたしは神を愛している」と何回でも何回でも神の愛が、父子の愛が、本当に自分の心の奥底まで感じられるまで繰り返し繰り返し念ずるのです。「わたしは神を愛する。神はわたしを愛している。わたしは神を愛する。神はわたしを愛している……神とわたしとは一体である。わたしは神の御意のままに生かされているにこう繰り返し返しているうちに、本当に神の愛が感じられてきます。神は目に見えぬけれども、神に愛されているのだとい

う深き感じが内部から起こってきて、本当にありがたくなってくるのです。その時「ありがとうございます。ありがとうございます」と繰り返し返します。そうしていると、本当にありがたくて涙さえ催してくるのです。あのマグダラのマリヤが、イエスの御足の上に涙を流してその髪の毛でイエスの御足を拭いたという時の感じは、そんな深い感じであったでしょう。そういう感じが起こってこなかったら、われわれが神を愛しているといっても、まだ「観念」で愛しているので、生命のどん底からは愛してはいないのです。

イエスはその時「婦よ、汝は赦されている！」とおっしゃったでしょう。われわれもまたマグダラのマリヤと同じく、まず、涙を流すほどに神を愛しなければならぬ。神と私は父子の関係だ、本当に愛し愛されている。ありがとうございます。——こういう神想観が楽しくないはずがありません。それは永く別れていた親子の対面なのです。神想観が退屈になったり足が痺れてきたりするのは、観念の神想観をしたり、自力で自己暗示をするつもりで神想観をするから情感が湧いてこないで退屈するのであります。本当に情感が湧いてきたら、恋人同士が逢っているとき、ただ「名」を呼んでいるだけで無限の楽しさがある、いつまでも飽きてこないように、神との交わりの神想観も飽きてくることのないのであります。